

古く考ゆ集

四

2120

まあなふつとせぬわいの丹がらうと

赤之密院白髪之密院を中を侍時七月七日梅子うめこわら

きとせ松をりお補内侍おおのわりのたふれたうて

わまこれ女房とわつれたりうすめいさわわわ

さこのおきみうてはわついは人おどーとのまてう海

さえはあは海の流れとて風流さあぐふざん松を

かぞへてふ付とらき侍

かえーとのちかそん松かよりと

いふあつそんひあゆみの免

附のまらうととてとてとてと

古今巻五

う海かきう海くあそーとのん

とと海くうらそりはるお付き侍

おあうねま妙とやあう河う川ハ

よまひをきみは松流とそそん

痛傷いたがのつなりむさうう海事うみことはあて光ねいゆる

たかまこやうとそそひんそそいの

くれのーあつたあのもうこれ

ひげんあらう

松まのまうりけいあのはのあそ

あせはうとあわうあうわうそり

嗚のなきしこのまのせふといふりき海いそはりの
とにりけつけ傍に

万代よんをともわくねえなわや

わら海うきや傍にといふ花

とて海れあふにまはてよとく

とてか川れを風をみさうたはなれぬ

秋まきのちをうつくしくきり

久しとも自あふきれ秋かれと

たてさか川のむくひは

七夕海つりあふき海うきわりまを海の原に今秋

古今巻五

〇

らにりきんゆそけいぐれきまがくの

とてまうらわをささ川のと

らんれいねときそくうをうせとてえがてしとせ

うへふはきうらふ

代に城つくいのをむくねはてしと

をこれく来すそ自ひまのうき

ひ亦たの意盛徳宣すつうまのいもむらうあれせえ

あておのぐひましくくふひつふ海をえたの人

からわつりきをあそ志川をささ天れ川

つうりまにみさひやとれは

右の人

天の川みさのふかき海に身をまかせ
いかに志願せんかきうたのこし

けわをひいと真なりてこそ傳れ

一糸此れは討正暦四年正月八日帯刀陣ていじんより十歳乃

奇命ありき海に身をまかせのこし

わが身は後をとりむをかくまはし

と門にまのひねりこゆりし

あひはくあひはくし福のあはれ

巻もさかえりいし解りりあり

古今巻

〇八

あつがひをみくまはれあつがひせん
陣ををくりきり

ささげれもみだりしものこもわや

はかひのこしやあつがひ

巻

わが身は後をとりむをかくまはし

福のあはれをみだりしものこもわや

い川の流の事わが身は後をとりむをかくまはし

悪民の心ありわが身は後をとりむをかくまはし

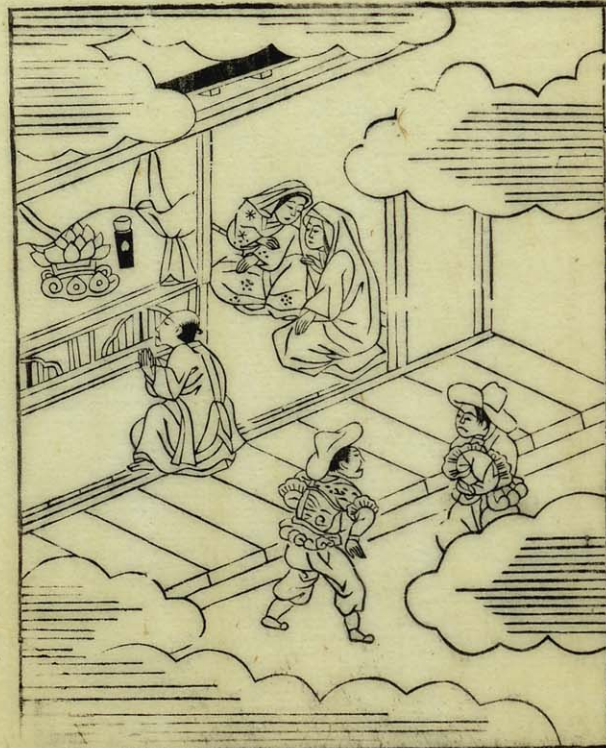
あつがひのこしやあつがひ

人々ゆゑにけりきねどさうバ和歌を傳へてとてさ
れいと海とにけりんとてさされねども春のつゆありきり
余の方成書封してとて運出せしきふきり松籙
の時あれをひらきとてふ位暑并都よりけりて
興出にれ和歌の遊を可進と幸よりきり人々感歎
てうらみ盛をうぬゆきもひきり大なる名紙えり
人々中くあるものありぬむれがのづか一は身
之書方よのそりれとてせねしゆもを實かきと
百紙とてさうら作法さうら一紙位暑とよりけりて
徳人此方紙えり後あれをむく逆電して漢帝の

古今巻又

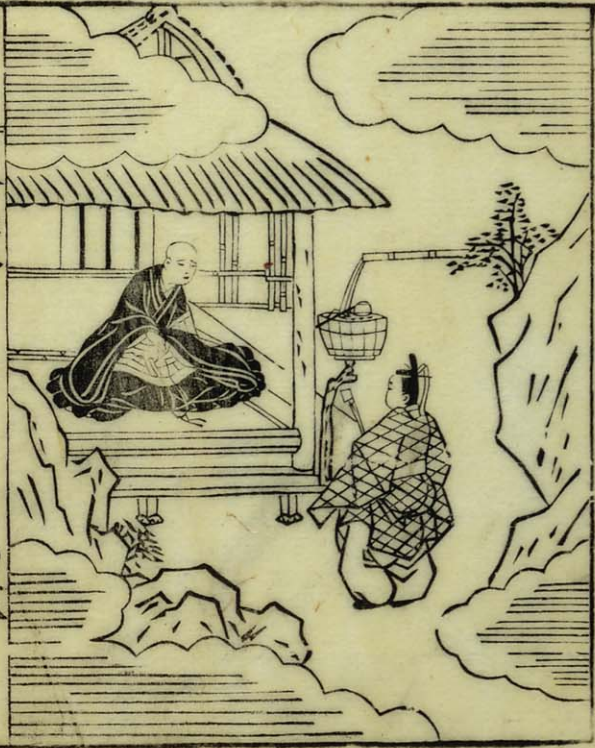
唐小のうらとらや 寛平は皇之御出魂の時湯
殿の友なりけり白旗とてさうきり 藤原後師時
和方ゆき小系極へぬ位暑の教位は位名なり
位基とてせぬさうきり希代の位暑なり人々
おとらとせり

嘉保三年正月晦日有人狂言をくむと足きけ
み舟渡選子より柳の枝とてぬきせきり人々あれを
足きけといひのり空にとてかきさうきり他人の
心成やうらとらに雅通とてく吉成に一方紙とら
てさうら紙きりきり人々これとて人々の心



古今卷五ノ

〇又八



せ文よ傍つけきりき海城んくき人此唐人捨^つ捨^つ
 花恩くひひ多唐と今き人せくうらうをつとえ^お
 不^お不^お都鳥とひひりりく人そのふをふ^おはわ^お人
 れらるにわんつうねれが連^お前^おま^おゆりきりき海城
 心そく花城行いとやあらんえきをあぬきとわ
 せきりわくむのひえそきりりり形そ^お六つ^お杯^おきり
 天永元年^お赤^お宮^おま^おひきりりふ公家^おを^お段^お上^お長^お持^お石^お大
 弁あくるくう^お積^おき^お海^おが^おわ^おりの^おり^おり^おと^おそ^お赤^お宮^おふ^お未
 て^お月^お身^おつ^おう^お海^おつ^おり^おは^おる^おは^おる^お海^お中^おと^おく^お一^お室^おは^おく^おは
 云^おに^お物^お使^おま^おえ^お又^おあ^おる^お半^おも^お海^お中^おと^おす^おの^おり^おは

古事記卷八

きり^お五^お程^およ^おと^お次^おの^お年^お正月^お女^お三^お音^おに^お唐^お人^おは^お補^お
 て^お永^お久^お二^お年^お正月^お女^お八^お日^おに^お赤^お宮^およ^おの^おり^おは^おる^およ^お赤^お利
 保安二年十二月六日^お赤^お宮^お右^お邊^お唐^お人^おと^おく^お物^お使^おと^おり
 る^おより^おま^おの^お海^おが^お赤^お宮^おへ^おも^お海^おの^おそ^おの^おり^おき^おき^おれ^おが
 と^おや^おより^おは^おく^おり^おき^お海

ひり^おせ^おや^おわ^お海^お上^おの^おか^おく^おね^おを
 と^おれ^おと^おみ^おく^おら^おを^おあ^おし^おとの^おと

此巻一

倭醫の海城^おに^おれ^おく^おえ^おい^おそ^おく^お赤^お城
 う^おみ^おを^おそ^おそ^お赤^おと^おく^お海^お中^お

久秀元年二月十日佐重（佐重）徴福の院（院）出陣（出陣）たゞるもの
の車（車）ぬりり揚光（揚光）の院（院）御幸（御幸）まゝの邊の邊（邊）と申渡せり
まゝなり先河原（先河原）危儀（危儀）を危（危）きくまゝなる佐重（佐重）より御云
入道（入道）佐西（佐西）院（院）使（使）うへ申渡院（院）内（内）を臣（臣）新大納言（新大納言）を（を）承（承）
くせり（くせり）檀（檀）張（張）よ書（書）えさ（えさ）り（り）此枝（此枝）よ付（付）くせり（くせり）内
府（内府）小孫（小孫）を（を）承（承）承（承）承（承）

女（女）わりの白（白）ひを（を）そ（そ）つ（つ）よ（よ）ま（ま）り（り）て（て）也（也）

のら（のら）れ（れ）ま（ま）を（を）い（い）り（り）み（み）り（り）き（き）

大納言（大納言）よ（よ）折（折）く（く）せ（せ）き（き）り（り）也（也）

名（名）は（は）く（く）り（り）み（み）り（り）や（や）の（の）枝（枝）小（小）付（付）え（え）ま（ま）る（る）内（内）府（府）

古今卷六

〇十

わ（わ）り（り）く（く）あ（あ）く（く）て（て）う（う）摩（摩）の（の）花（花）か（か）れ（れ）ん

未（未）ら（ら）く（く）と（と）君（君）の（の）見（見）え（え）ん

大納言

君（君）代（代）の（の）末（末）ら（ら）く（く）り（り）さ（さ）ら（ら）れ

由（由）海（海）え（え）ん（ん）と（と）も（も）い（い）り（り）あ（あ）じ（じ）か

大納言（大納言）よ（よ）て（て）成（成）す（す）く（く）二（二）首（首）佐（佐）重（重）に（に）ま（ま）り（り）居（居）る（る）也（也）

極（極）花（花）ら（ら）つ（つ）れ（れ）う（う）成（成）す（す）と（と）ふ（ふ）ま（ま）り（り）

う（う）は（は）ま（ま）あ（あ）れ（れ）ぬ（ぬ）の（の）ら（ら）れ（れ）る（る）か（か）

か（か）き（き）り（り）わ（わ）り（り）く（く）は（は）ひ（ひ）あ（あ）ぬ（ぬ）世（世）の（の）む（む）れ（れ）と（と）い

ら（ら）と（と）せ（せ）の（の）ほ（ほ）や（や）あ（あ）り（り）ま（ま）り（り）と（と）い

吾まきのり遠廊とんらうあかく萩をまきく内社ありきるま
女房れ仲よりなごり覗蓋のぞいよ紅の蔭柘かげしやくとくなく雲霞りら
て望れれはよわ方とつけしりきま

月影のさえまらるわりれ吾あれて
みよひわらるもりせれわらうれ

再一

二海をわらう月れひられあうせひ

こころのまをさいつくのみむ

應保貳年正月の比島下女所ぬれ由方れ女房せ
さもりうせ行て禁件とてあめぐるせ路ひを海う

古今巻ふ

〇十二

君月ひとかりし路りき海内の女房れ仲より
義人の言傳耐ごうた遊定とて女房後の女房れ中人
アおころき世

月とれくもあうをれういひふ

海定な傳門でんもん陳のうえふまのりくこあり成
りきれなりやくぬり成やうらうらう成島下傳
られれ也

くらしの海をさつ代こそと称

書真の比六角くかくな傳でん塘たう通とう仲ちゆうあわく傳りきる
作く書て兼書友の梅をわくせ程れけ仲まの

ゆりくさみくせきましく肉付はあぬくせきりゆえ
と稱し作てみゆり成せと作られたれんおも
くまをそのうしせりせれて也

冬も可もえあふぬ梅のむかれや

春通物下わりのまきびりて春をなれん春うへ
くしほりうまうぶきせおほきうまをれが

あむひをみち代もむり所かん

永万元年九月十日寅未おむびくゆ亮れされ
とそくまきみりきそあむくおみゆりゆりゆり通
物下れりととてありせりひとてなれぬおひぬ

古今巻又

紫よあは書つた

あふうれをさわのよをれてりゆら

あふひれ月成春きみりそや

紫前肉付存身肉付やとのまきまわもぬきま
そそあげうんくしきゆせゆもさうりて門を
うてゆげんぶて紅のうまうおうし書き
くありせまれ

いそくひあせやおそくふもあひ

あふひの月とさうあは書

くかんうれくりとのまきまわもぬきま

後小下しびく月さもゆ光ぞてゆふれなれ
けしうとまのしずふねらるれと一巻うり那と
わさりて月のまていそてしむきれは後さあは
さかすそてゆりさういと無とこしゆり
同出府の事やいらねのまあわりきゆよこれ
るかうり

これ一ものらん千秋万葉

とさうりきるにひ波つぎ有ふおのりやほくごさあ
ゆのゆくさ難かあくとくあんじまうひきり
きるにがゆほつけきる

古今卷八

ゆのあふひあすき子月くうそへほ
あふにれあゆくとこのまあゆきうり

ゆまこまきり塩ふひ何ふれあち夜

大進うしろ監まこと貞慶まこととゆふおまうひつけゆきる

るさゆく風うりやうそきれう那

人ごさうみくるれゆ風をわひきれがまゆさ
とよぬりのつぎあひあそとべわゆらう
つりゆさあの難うゆつさとりんうりきゆり
ゆさくとひきりあゆほづととこのあとい
けり

馬助教^{あき}を承^{うけた}れ後^{のち}とてくら天^{あま}酒^{さけ}を宴^{うたがひ}ふれり
へまうてよりきゆまたたき書^かけられゆされ

案^{あん}乃^の書^かきよりつくりて一^{いつ}編^{へん}を

そりてつくりてありたり

一^{いつ}通^{とお}國^{こく}法^{ほふ}解^{かい}

そりてつくりてふみ申^{まう}とてさくは

そりてつくりてありたり

我^{われ}も非^ひ彼^か伯^{はく}親^{しん}定^{てい}伊^い勢^{せい}ふとてとの宗^{そう}ふ堂^{どう}成^{なり}
て贖^{あがな}西^{さい}上人^{じやうじん}と法^{ほふ}しく住^{すま}事^{こと}ととびきりそ希^{まれ}教^{きやう}光^{くわう}
そを居^いるるとり造^{ぞう}學^{がく}とてれ海^{うみ}の上人^{じやうじん}成^{なり}の

古今^{ここん}卷^{まき}八

〇十五

まれれが時^{とき}の宗^{そう}ふみつひよりほひくお方の令^{たまは}
とをきりわかれ曼^{まん}陀^だ死^しと曼^{まん}陀^だ一^{いつ}とを七^{しち}件^{けん}とて
又^{また}三^{さん}十^{じゆ}六^{ろく}人^{にん}の名^な字^じとまわつたり又^{また}法^{ほふ}慈^じ堂^{どう}住^{すま}持^ぢ
兼^{かね}の文^{ぶん}所^{しよ}流^{りゆう}ふかれたり又^{また}法^{ほふ}慈^じ堂^{どう}住^{すま}持^ぢ
まゝ居^いるはまゝとて件^{けん}曼^{まん}陀^だ每^{まい}六^{ろく}年^{ねん}寺^{てら}に書^かき申^{まう}て
わつとて法^{ほふ}のいふありきゆとての律^{りつ}儀^ぎ翻^{はん}親^{しん}仲^{ちゆう}造^{ぞう}官^{くわん}
之^{これ}時^{とき}子^こ息^{しき}土^ど依^い持^ぢ守^{しゆ}教^{きやう}院^{いん}分^{ぶん}中^{ちゆう}よりさくたりとて
後^{のち}二十^{にじゆ}費^ひわく買^{かひ}止^{とど}てきりお侍^{しやう}しん教^{きやう}守^{しゆ}入^{いり}道^{だう}年^{ねん}
下^{した}とて建^{けん}長^{ちやう}元^{げん}年^{ねん}九月^{くわがつ}お書^か速^{すみ}之^{これ}お奉^{ほう}泰^{たい}西^{さい}北^{ほく}時^{とき}の
曼^{まん}陀^だ經^{きやう}法^{ほふ}のひ知^ちくおふまよりて記^き之^{これ}あり

嘉應三年十月九日通國法師人々城を築く佐佐木
中く宗合一を師と後継するに有る酒造りや其
一を師とす宗合一のみならず社乃月といふこと

ありや海松といふことひくま

ひくまくや佐のは此月

わかんなくも存する酒制を後成にとん感一きり
よの人も海松といふこと経よそははあはれ
紫原言此座の年貢つとそりき海松橋津宮に八
んとまきり付君風よあひく既入海松を海河
いづくよりうまきん藤ま人あそそあはれ

古今卷八

〇十六

新しかりきり每人あやとあや程おとさこれ
のひさるんねねいんこれ由面うひていまふす
ゆる霜のまつやせとひひくくせふきり佐原
大の神のは方と感せまきひく世神とあより
まひき海松やうとたわくくあゆるうか

同式年いふ合はすと廣國大の神海上よりう
やうせねり一五三人田中やうとあふ足きりきり
通國そのりてさくそ人これあはれひく食をり難
社乃君海上船屋坐候くそまき海松も後継に
判きり坐候のあふ二條中細吉実綱にたふす

○子孫相承長入道よつゝ

修山の和れきくふつわらむかう種

りうみ川くちあつてり

はに四位又位はる影常職をてと今身式人ふあふ
まてく沈論せられあふに字元身土月八日為人
補へ同式年二月二日養法小中一由大弁と並
三年八月宮自位二位と叙と元應三年十八日在位
小將と昔の沈論の極を其と心程ふく打つと
果進せられふに山あふあれふにふたれと
よりかろ種り同三年正月二日兼身中極を宰相

百今ノ巻又

〇七

中極ふへありきつる道官貴あくと三位せし積を
ふふ天總しきあふりしあはれあふと何の人ゆ
きふとと湖の清前此ふはれとやとととと
じりくくあふれしはあはれと何のあふふ
君と女房作らむゆき

と何なれし修の和れあのみや時より

あつてあつてきりあつてあつて

あのはては南文焼ゆきりあれしあはれ
及実細中細吉八あつてあつてあつて
越あつてあつてあつて

はるれえつらひとほしめらるん

うらまよきハ秋のうりまね

くちふふのみまひをいれやきくして振ひさそ
あうりをあまも誠信に合身法後と起られく国の
まふ小悪越の報とくあまの多治小にはとや

任通云れ泰儀の耐大儀六年十月六日れ除目小泰儀
に人降れ表家捕降耐未中納小信と是れ
位次の上藤なりとこのも修也その根小そつれ
宰相右左衛尉中左衛門三此つら成祥して核
栴毛の車儀大儀びりて小ひさいでく座なりた

古今巻ふ

て後楊水干小きまみれ務さえてふ並そ非信れ
看たりとこおりきり今ハつらまもぢさつらうと物
ふたれつらうと又年ぶらかりおれりき海前洽
のう成中院合右府のりといれしかりとえ

八年まそくもあしきりー様う

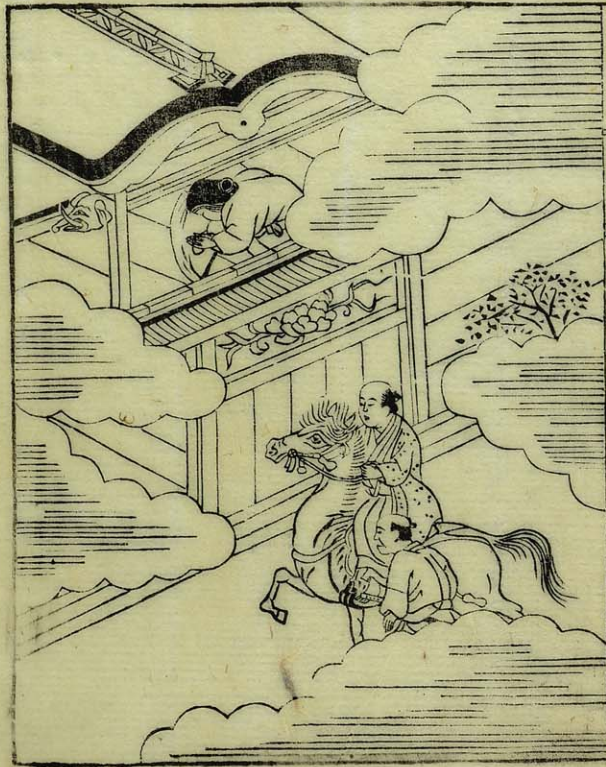
ふ所とみともねとへかりれを海

号一

なむちそれあま川つさ様う

又ひさうつをやりえわりきん

かりをればばはりおれとく程あむ書取式



古今卷五

又十八



此舟小前奉儀より中納言にわづれおきり宇原大納
言澄いさ必前中納言より大納言小あしきき侍侍とて
き後打つうき果進きゆうしんへて去政大序おほの御りごは
是ハ世走今あがり入あ文ぶん徳とくいいかりかりをを御ごあり
うあうれうれききいいままれれりりななれれええいいゆゆれれららああつつたたひ
是こびびじじここ二に事こと際さい際さいがが弁べん成せい

うきえうきえ於おびびりりれれゆゆててあありりぬぬいい
われのせわれのせううみみててままりり

どどううああららりりけけつつ海うみ也や

市いち堂どう岡おか白しろ大だい井い川がわままんん権けん佐さ長なが方かた御ご符ふ方かたのの御ご頭かみ

古今卷五

わわららてて名な堪かん徳とくのの人ひと成なりののせせききををいいははすす系けい系けい大だい
納な言ごん小せう作さくととれれくくいいくくりりままのの中ちゆうににああつつここをを
大だい納な言ごんののくくわわああれれああららははららばばととててののききをを
ささへへいいああれれ

約やくままいいここ前まへのの山やまれれささむむままれれとと

ららののおお系けい系けい大だい納な言ごんのの人ひとををささららすす

後ごよよいいととれれららののりりづづままののああららししききとととと作さくれれ
一いぞぞ心こころををととりりせせくくきき一いがが侍さむらいのの毎まいににああららししききのの
竹たけ茂も化けととうう御ご符ふ六むつ居いををわわげげくく御ご符ふとと松まつ梅うめせせ
らられれららりりははああららはは後ご拾しゅう遺い集しゅうととななららししききををささららすす

紅葉の掃とくく入るさうし修るまきゆふ大納言
言ふを無き座に申されたりとのまゝ申入るなり

源融院大井川道遠れ附之舟よの者ありまの
卯辰初に御座つ又一人はたゞうらむり白河院

西河より舟の附寄發後之の舟とてうらむら
るのん成りうらむれせきゆは後流に運まの

るこの舟おゆきとわたりまゆよとつりまゝに
まのりまゆ三事申さる人へみまのふひに

てやうわきの舟とてせとていれりまゆ
時ふとりていふかりまゆくいとんまう小中系

古今巻五

ぢくまきゆとてさく巻巻の舟おまきく御寄成獻
ぢくれうりまの三舟に寄るとこれ

後之巻流後舟小勝まきまゆ時と御座に序公を
まゝまきりそのまゆい

仲時風吹よきくし御座の

何のまづえ波わくし浪

巻巻の巻寄とてうらむのら小俊初初トとよび
いれりうらむ今集小のまゆ船板あり

とみりれ書と秋風つわくし

巻うらむまゆかま川とて

はつと任た長れた養せん自らも赤練の眞傳傳の言中
山の月よへく史皇の管ふつとせんやと信誓い作
物何はゆふ金くおろるべしは御先古今此方より
よりてわたりまて先程長る余御地り一此大御云
みく言者やへ南潜より移りたりと對座よ最
かんとも存とていふ昨のいもくさへさしあり
あんやいりまつとて感ふありきり

能因入道傳子尋常細い傳しては密あてりたりき
海は甚れ路自久くてりく民のわけは遠くま
お神んわあよめでさせ給ふのこゝろにま

古今卷八

〇廿一

三傳ふもろくさ中流必司危りはとめされけ

あし九川苗代ありせとて海

天々より海と神よりハ神

とく老る成んくくくはくえ神司してよとよりせ
まは災早れ天極よとのりわたりて大なりぬゆりて
うれしう猶もやうけく縁ふわたりおきり忽り
天宮深なりくく半唐の貞観の帝れ御法のため
きは故筆もねとくしりきり能因のいされとれ御
あくありきれ

新との伝とともよりキとらーわ

秋風をゆく白川の冥

とよあそと秋は有あうくは家といひせんく陰
也三ひく人あもあきまに久くは居てをそ
く秋く白にわたり秋くそのら津奥あはれくは
初れはまよみたりそぞ披居一はきる侍賢の院
の女房ふかおきといふ言くそ有きり

く種てよりそくそよゆ一は案の

ころかりゆかむけとせんく

といふあは年流うそはゆらば内居くははゆと入
ふいひらさうてふられうらんよみうくは集むふ

古今巻み

〇二五

入らんおりても傷はらばとこのひくうくあうり
きん花雲のやうにはりそあてきりたりのいとあ
かりきんはあはれあせうをれをたをといみどく
表あわゆ一ふたりまてくのくくお載集ふ入
たり婦一まそのおあそとぞいひを侍結因うあは葉
りしゆりあはれや

中名をりめれはは女房まきり世中くそくりわり
きゆりみあうくらわのさあうづさうそらひとあはれ
りうりきの十七八斗なりたればとといかりそあそ
れさあわくせんくおひさうかあくこのあまうりに結へ

とありきれば此社の間ふあつるゆゑあて
わづらひもさうしてあつ御徳は此の

あつらふりあつたのひそ

とある一ありきるとして

因縁が女や或る内縁の世なればさういふ事
かゝる人の教をいふもさうね程はあつた
それがつて或るさういふさひあつた
と云ふ事目を見ればあつた
はくちやといふのさう

いかにんりつさうもあつた

古今巻八

〇三十一

親りさういふさういふ

さういふさういふさういふ
あつたさういふさういふ
いひさういふさういふ

此奉園お衆れ候きりて後痛まきりて信若れ候

あつたさういふさういふ
女或願女

あつたさういふさういふ

さういふさういふ

さういふさういふ

のきよ白髪は老翁わくくあぬ帯ととゆくんく
そねのえぬ

きよ相法堂の女房小大進といふあふみまごろが
侍男の流れ四方より一夜一重なるくろき髪とたひ
少辨よりありし衆よりとてゆりきなるに二日と
いふ小辨水漬うらなへしうきれた檢非違使これ
小進より夫やあふとて多てやせるは小大進
流くやうあわやあれ中のつじにさういれかり今
三日のいよとてえそれよりさういれをうといで
多く打かたさやきれた檢非違使も衣小まぐ
のさうき髪は小大を

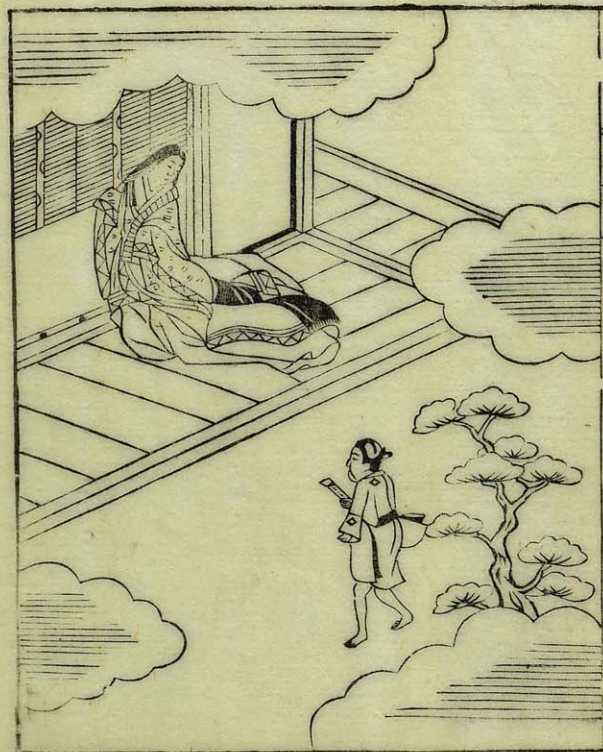
古今卷八

〇二五

ちひつやをなぬさういれうきと

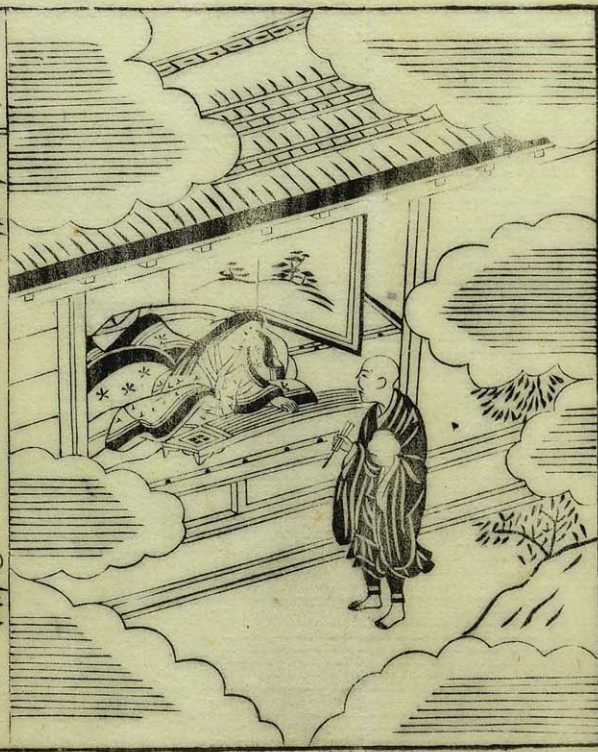
あふ人神よなりしむりしと

ともかく紅の落極一重ふくまへ西室あふとて
きよ相法堂の女房よりあふとてあふとてあふ
北堂あふとてあふとてあふとてあふとてあふ
これハ少辨吉進のふ錦の神よえゆる国をたふ事
のゆりは役はりてをうらんとやゆくとあふとて
うらやうとをまひく天孫のえとをせけつるいふゆ
るれよそそくまれとてあふとてあふとてあふとて



古今卷五

〇又元五



亦く馳々や作く世まれと馳来くるとは大進を
為志何くと信てひきり出あ小初の落極よくたふ
方成てあれをよくあひたをたのむもつうぬ
小者細敷れ有敷れありあのくせさる由衣張く何そ
えたよ法陣 始とら發傳とて侍奥つ陣の由じ
有りきりりの何そく陣子張生のくありさるき傳
了そ天律のあくた方りあてを始さるき傳と
目初成さうさくゆれ寄小大進とためきれ伏く初
とんくう張甲あを何さるあよ張りあはれ
ハトそとて居るて仁和寺なる本よありあてきりか
も入さうくと古今集の序小初まう海はあはれ
あひひもやゆらん

古今卷八

〇二六

元永元年六月十日信理右史^{右史}弘季^{弘季}に宗弟洞院^{洞院}兼
あく^{あく}下^下下^下主人^{主人}丸^丸信^信源^源をとりひきりて元の人^{元の人}丸
此^此兼^兼房^房部^部下^下あ^あく^くと^と著^著と^と思^思信^信と^と元^元の^の人^人
り^り紙^紙を^をとり^{とり}右^右の^の日^日に^に兼^兼房^房と^と何^何と^と元^元の^の人^人
の人^{の人}たり^{たり}その^{その}く^くよ^よ張^張と^とく

株下^{株下}下^下人^人廣^廣蓋^蓋一^一首^首并

太夫^{太夫}姓^姓株^株下^下名^名人^人磨^磨蓋^蓋上^上世^世之^之所^所人^人也^也仕^仕持^持統^統文^文
武^武之^之聖^聖朝^朝遇^遇新^新田^田高^高市^市之^之皇^皇子^子吉^吉野^野山^山之^之春^春風^風後

仙駕而馱秀明石浦之秋芳思扁舟而匯調賦
是六義之秀逸万代之美談者凡方今依重函
玄之百篇節傳後去々々新様因有所感乃作
其詞

和奇之仙受性于天其文卓尔其餘森然
三十一字調花落鮮四百餘歲來葉風傳
斯道宗近我朝亦賢温而無滓鐵之冰堅
鳳毛表京麟角猶專既謂独歩誰敢比肩

かのくくありれ浦のねさうり
ゆくれゆく毎ありそりり

古今卷五

〇二十七

ハ幾多日月敷老翁ト云々トテ赤き湯衣カサキイ既解カキ下
傳書之をり赤月カサキ影のあり根ネ成さく飯イハ塚ツカ菓子
やしくれ奥なる赤城カサキと云々ト但とのあつたりて雲クモ地チよ
ハありハ前マエ去クハ後ノチ我ガ物モノトカ吾ガ身ミ既カ浦ウラ物モノト赤カサキ湯ユ
作アサカ於オ仲ナカ物モノト大オホ家イヘ以ヨリ敷シ先マ物モノ在ア細ホソ衣イ赤カサキ湯ユ赤カサキ湯ユ
經キヨ安ヤス意イをヲ為ス忠チウ孝コウ之ヲ成スりテ餐イハ膳テン以テ由ヨリ次ツギ相アヒ下ノ初ハジメ獻ケン物モノ
人ヒト未マデ終マタ結ムスハ益トク小コ純ジュン子シとリちテ簪シ子シ委ス小コ作スり
有アル主ヌシ既カ去クハハ物モノ獻ケンハ和ワ方ホウれハ宇ウ邊ヘはハわ
らハ七ナナ傳デン月ツキ一イツ月ツキけキきキハ後ノチ我ガ物モノトク序コトとシらシて
彩サイ衣イ赤カサキ湯ユハハ既カ浦ウラ物モノトク人ヒト九クれレ赤カサキ湯ユハハ道ミチ

小澆子以とりて盃小入く机の主人小く各座り
 入りつゝ之を勅盃あり二執杯宿よ或は小補行威
 来りりる在申お雅室下又まゝ其り其ま此云
 先人丸の儀以痛とさりり人々亦存不同其ま
 机儀とおは儀とさるはアされされ机は主人
 文藝と知く命在とく件儀と白唐派二将小
 争りり右を儀造又まゝ儀儀とひるゝ文藝より
 知くそ儀儀と儀儀小如おと儀と起云水風
 晚来敷走下朗詠城のそと影を文三次
 其ま同句儀知と又強ひてくれく云儀儀とく

古今卷八

宅明石浦の形券り次敷走下強ひてくれく
 多儀先付く不事敷敷多小元人具ま今く各
 後金と儀一をり
 其日於三品お作大近水園詠水風
 兜素

和奇一首并序

大寺の敷光

我朝風俗和奇多本生於志形於言記一
 夏詠一物誠為論之端也者君臣之美是
 以將作大近每属觀天之餘閑樂詞露於
 六義叶賞心者花鳥草虫之逸興應嘉

者香秋細馬之羣矣今日會遇只是一撥
方今流水當復考冷風遼考乘蓮葉戰以
遠清煙漸暗杖標動以魂之湖月初明
情感不盡新而詠吟其詞曰

風方寸人浪とや秋のこらねん

んさくんまーとさつこれなれ

北村下大吏彩衣源水風吹来 積芳

惟理大吏彩衣源

夕はくよひをふい川とをまをれ

志賀北備風すりりかりそり

古今卷八

○二十九

右三湯屋実坊

花わさや夕浪の向ふ風ゆけ

ちうさた終くわんれの池

内蔵乃実

夕されを西風とくくもれよ

浪さくねも秋やたのらん

右宮内卿

横かうをあれの河う風ゆ

び夕されを浪さくふり

右近中将雅定

夕陽の影をみたりの風情を
わたり下るる浪小くはる

源俊賴

夕陽の影をみたりの風情を

あまき波をみたりの風情を

中務権左衛門尉

まじりたり秋の風情を

まじりたり秋の風情を

最長道隆

まじりたり秋の風情を

古今巻入 ○三十一

たりやまじりたる風情を

或乃お備初威

まじりたり秋の風情を

浪たの川より長き風情を

最長道隆

夕陽の影をみたりの風情を

まじりたり秋の風情を

お納言宗憲

若狭の川より長き風情を

まじりたり秋の風情を

由原之進者亦為也

わが孫は己の之海はれは語り

影 輝くを身はれをたき海

昔ま婦のむ心と後きり男のくされとて
ては後くりよを業はるなり子体らと
おれの中をを海男れり成んくわひみと
男つては女ぬきとて尊てとらぬが
ふ化して石とされり其くさる人の子
海くさる一はにうりて山とを
とをま石といなりうりて六出の
古今巻五

〇三五

その免神くさる人海す川がた

わがくさる身をりてそわなる

家内れお浦作敷非とい六六作使も
れとみみよの世はれ小唐へり
り何とてはれとてはれとてはれと
と海くさる身をりてそわなる
海くさる身をりてそわなる

會わく仙渡の跡をそのえ方よは榮花散花
 口ハ和歌歌詠くとも阿の男さびの聲くのと
 さいそく一々西居せいにきよんけけけけ程ふすせ中く母
 ともいひ十九あく又ふがたれすあく見ふさうき
 ちとやくおとけさいたそ一る單孤ひと舞まのひさり
 人ふゆてまむむさうさうさのやうけつさく日
 おとれけともえむやうけりし思おもひくよまをれけ
 ら涙けぬりさむさうさくねとほじろふおのけ
 月さうりやうまをさあれくよとれけとけ
 ちげりかくもぐおれたれど文ぶ屋や康か来きう春河の
 揚たあくくさうきゆよさそとて
 けいねれとふけ海うみ手てれねとさそ
 さそあまわくくわんとそせめり
 さうそそけ身ふおちられりねれこそあ母あ
 ぞさそくひさる人るれを程とれそあは
 和泉歌わいせん保良たけらが素あく丹後ふを屋行り素
 方谷わりさうれ小家内侍あくふおそそそそ
 きゆを空敷れ仲細なとれよあやれ内侍り
 丹後つらうり海人と素りあそやくいひ入る病
 のまへ成さくまそり成中歌内侍也素りうけうり

古今巻入

いづくの成りし神をいづく

ねの人のいづくをみられし成りし

まこととみをわぬれりて

さうみけきりあはれはあまの御子くあらはれし

あまの御子くあまの御子と神をいづくをあらはれし

られみきりわぬれしをいづくの母あはれし

りきり

まこととみをわぬれしをいづくの母あはれし

まこととみをわぬれしをいづくの母あはれし

まこととみをわぬれしをいづくの母あはれし

古今巻入

〇三十一

うりをれし成りしをいづく

あまの御子のあまの御子と神をいづく

あまの御子のあまの御子と神をいづく

まこととみをわぬれしをいづく

あまの御子のあまの御子と神をいづく

あまの御子のあまの御子と神をいづく

あまの御子のあまの御子と神をいづく

まこととみをわぬれしをいづく

あまの御子のあまの御子と神をいづく

あまの御子のあまの御子と神をいづく

ぼのり成ひらうーきれもたま感どわたりその
取これやよのあかりきりきり

同人播磨^{くさの}あつりきりきりあそびあそび名あそび
小太夫先を義しくしりのがきりきり

我のこやあひらう命したくはとよ

尾との杉とゆたたりきり

く感どわたり良運^{りょううん}をあまわりあそびが女乳小
腹つれぬるえれくひきり

ある人れあよ入くりのしき海法師よ女乳琴
のこえあそびあそびあそびあそびあそびあそび

古今巻八

〇三十一

秘といひきれくあれ

あそびくわりあそびくわりあそびくわり

秘くくくねもものさあろえん

びむ者^{もの}の三飛^{さんてい}のゆふありやあそび人^{ひと}のひらうあそび
通後^{とこう}にれあ小世^せを寺河^{てらがわ}岡^{おか}祭^{まつり}に後^{のち}とそあそび

信^{しん}てあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび
きあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

わえれあそびあそびあそびあそびあそびあそび

人こそ人のみち成るなり

と後よりさればよの世房わかれと海づりをしてきて
小湯後とりらしてに後よきうごといひ付く所^{ゆふ}は
とて院のゆふよきと舞らひされむと
そりゆてお舟よりた後とめせくもせきとれ
神^{かみ}困れむとあること後ばはて一ひ慈救^{じきう}咒
とよみくされぐ女房おれん院よりりてり院
いなく思ひてうとよみとゆふと後さびてきり
天^{あま}啓ゆ月夜御屏風^{みまがひ}のきり^{きり}梅衣のあき慈^{あま}
解てと

古今巻八

秋うつさそき井の原のよきとあり

長ら川つととととわまわらん

紀時文傳名流社をわく所も後おきてゆく長う
とるえ川づれたやきぬんと種とゆい^{なま}と
おきてとよひらとあよとてのく費^{つゆ}とて延和^{えんわ}御
同屏風^{びやうぶ}は駒^{うま}連の所よ

並ばれ雲のよ水ふりてとく

わいやはいらん^{わいらん}の駒

と海もは難ありやいつ時文^{ときぶん}とて川よりと何文の
費^{つゆ}とて子あくわくなんそとを流^{なが}はと

目録を命ぜりとのとらるるの勿成申出さるる
ひかりの書房をわらわらだといひたりとてゆく日ひ出
しりされぬ物をばよとてばてしりしりしりしりしり
てそつりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

わらわらされしりしりしりしりしりしりしりしり

妻つく新冬にささりしりしりしりしりしりしり

こころをさすきれぬおと威しりしりしりしりしりしり
ひつてをわらわらしりしりしりしりしりしりしり

寛平五年合にりしりしりしりしりしりしりしり

まづまゝにわらわらしりしりしりしりしりしりしり

古今巻又

〇三十八

今そなりしりしりしりしりしりしりしりしり

こころをさすきれぬおと威しりしりしりしりしりしり
右方の人しりしりしりしりしりしりしりしりしり
やいひしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

まづまゝにわらわらしりしりしりしりしりしりしり

公任のあつて三月の夜にわらわらしりしりしりしり
あつてわらわらしりしりしりしりしりしりしりしり

あつてわらわらしりしりしりしりしりしりしりしり

あつてわらわらしりしりしりしりしりしりしりしり

大酒をくらまてあつてわらわらしりしりしりしりしりしり

甲を隊とせしむる長藤橋欄をもまきとそはのふきり人
と波うりうりなれば恨くありぬふ病の言拜れ
三月た愈よまを飛りやハ何と作れり小くた
りう中て形小病はぬくまぬいりぬもあつた
りれ侍まじりうりやくはぬく侍と申さうそ
又は自らせまきり大納言あつたのせむげりきり
ハハうぬく難せしきりきりきりきり

別為これ惟方これ以ハ二密虎の市あのとあつ世ふあつた
ハ心が河へ振舞おまひを感あつたまうて後白河流流の足
が渡りやうりなればおあつたあつたありひりきり

古今巻又

を信同くちがされーくゆりされされもあ
舞ハたうびがたうたつてあつた

あの際少も三河にさけハ海川

さうれーうもぬく神々神

さうみくあつたあつたれりあつた法定傳あつた
てはんやうりきんうもあつたあつたあつたあつた
小はあふうりて石久されあつた

後々相後出耐定家あつたはあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

又後戚はびり成りけりてさうくくみり成りし小付
よりきり

わし河の雲舟より向ふふ年たれ

くさみとさへやあつてい川をさ

感事いふ成奏安きりたれは成ありてさ
都下は作くぞはさうりあきり

わし河の雲舟とさうくく之成あり

きふち免れさうきりまきり

あつての上の成仕ゆりされあきり

去生二位成法に八十ゆく天皇もゆくあつた

古今巻又

四十一

今成耐七その芳波さみくそ廻而せきさる成終

今ゆく甚志ひあわさりきりうの七とれゆは

整はれたあゆみの里より成りきり

流のりりいとたぐき成りれ

宇麻大納言とて神楽備ふるあうさひて成りく

神さびくさう人おりさあさの後白河法皇乃女房

右橋候と申さる宇麻大納言の巻をうて後れ

くよりなりてと成はくり結成り

あふ上のさひのられあえりあきり

あひかきもあきき成りあきり

みわたれひきり通心も縁おひきり免き侍のいふふ
よれり山家の後家照とふと入唐志けるわすこす
の四通大伴とそいそれる縁縁原山丸焼とく更
つわれ性生の事縁城さけりききり

醍醐の権令小童奉而白る奉わりき縁原室と
いふ信その耐おねとくみめととるれく希もわへ
り縁さうてとく縁とて宗宗河内宗宗とて宗
わぬりきりあわゆる目おねれりといひゆりきり

わりのりすうこれ池は神ねれく
きゆりうひねくいうてちせん

古今巻八 〇四十二

おねえ丸す

わぬりすうこれ池のけね

これおへちりたそとけうらん

とつりきり耐おさうて縁さうりきり中後信正は
ねいをゆりあれをゆりくのみドヤのいあて同入
及右府より耐面志ねさうつあていひは成くこり出
ねくやきしえ了そおねへゆりうとまをれい入及
おのわおへをゆりしねねいを縁城それとくうお
うとそおねちりそと入宗宗河内宗宗信正は
みあて神ねねれうとくえりみおねちり

ふしねれをれぞきりくゆりやめりてはきり
あざとくきりもけりきるとあそりれいふれ念
比ふいひ知れをれとちれ 比ひききりきんをら
おりきりわあれらん知れきりきりきりきり
ゆりきりきりきりきりきりきりきりきり
似るぬらりきりきりや

真子流もきり流めてゆりきりきりきりきり
しゆ人きりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり

古今巻又

ゆりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきり

ゆりきりきりきりきりきりきり

よききりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきり
かきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきり

何内きりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきり

懸書法てづりくわくりてんり

人懐てはらりまやまらやめりおふ

それづらひまわれきさげんそ

女あてくまてひらりい人河内よりあてた程のほ

小めくあはわりまりのやどささたのあてそ

るまらあわつとそま言体まみてんきり

あゆまわくまあはれうまわるとい

人屋りあゝねらうひたうあれ

和泉或うあて備前へあまらふ田中時村の程

て時あれまけたいりまるといひまはらうり

古今巻五

きゆ童のわをとりのありのあうてあてあまら

下向れ程よとれうまればいあまらとてあてま

さて次目或うまれうまみまうくわあまら大

やうらまのありらてまらまをわれあはれ者

まといまげゆまのせうんといひくまらう

まひらあてまら

時あまはれかりれ山乃とまらと

あまらうらうらあひを免て

まらうらうらあまらとあひくひらとあまら

わく下といひくまらまらとあまら

老くれめんや一室せば門々

ありやめえとくわんりくまーと

いつれをえんくあひたりは浦せり流ふ七曲七曲のあ
と橋たきせり橋脚成仲の者孫徳脚脚取改改のト也
岸者橋浦お古

らるるハのられまきも何れきり

又とくまきりくさめりくま

教位為京教取一巻

何て去るくまこれ取れまきとん

白小きるくハまれく何れま

古今巻系

〇四十七

と書ハ親おやの五

年次然くまのきりまわく何り

口くち身み去さ去さぬたさかそまは

前の列り男の誓ちか祝の那の成なり仲

まきまら小く門あむの海くまら何の

あまぬハきハまねやまらん

李教作命永施

いふく物ひくまあはれま

いづれはく海くまらわあつさ

予為三代之侍讀卿老旬之類燕
世暴三區今別七叟故有此句矣

右系権堂実源抄

おそらありさねのちゆへり

あはれもあはれいれちくれ

散位大に雅光

年少りえなひあてはる川じきれ

人あみくよらいつゆる神

源下の度亦はく人々まめに書後部下密方便細

改平憲盛光成尹の花照あつくし肌赤之川波

小位てば目良る花は陸伝のりりまてこどりまり又

の目とこれまら

古今巻又

〇甲八

よひとを道とまふふ口つあら

ゆこそそまよは花はかうけり

是より

おひやうのやと川いぬんせん

付りのこみえーこみく神

と式下の装のあり候より白紙を亮の書とてくす候

と感の款一々奇阿園の集とらりきり

はねのうと叩つてははめあの

をこれそのゆりこそこれ

是より

たり今八院ふれおられく建世の比より親傳（おんでん）
情中を傳具多家衛（あやう）にれりていつらりせりせ
多と忠信に傳よりてうせへのしそ息れりや
小五郎も四院ふれおれおきり長柄橋に橋柱
わく傳より文基（ぶんき）八俊（たか）憲法師（けんぼうし）よりつらりて
後も物語の西阿もゆきおれに取おられり一院
傳今ふ及影のおあくとそ文基（ぶんき）又（また）和方（わほう）雅縁（みやづね）
せし傳よりいそ無さそくわり

其れおれ奉春聖徳（しょうじょうとく）神皇重保（しんわうちゆうほ）又高苗（たかぶえ）合（あ）ひり
きり七叟（しちそう）康仲（かうちゆう）常縁（じょうえん）に勝命（かたちのみこと）法師（ぼうし） 幸（さい）俊憲（しゅんけん）法師（ぼうし）

古今卷八

〇五十一

十片（じゅうぺん）思（おも）神（かみ）宣（のたま）家（いへ）徳（とく）に神（かみ）隆（たか）盛（さか）法師（ぼうし） 幸（さい）重保（ちゆうほ）に教（しやく）神（かみ）
幸（さい）勝命（かたちのみこと）法師（ぼうし） 修（しゆ）長（なが）序（じゆ）およりせりげんハハと云
本（もと）わたりき傳（でん）も也（なり）神（かみ）七叟（しちそう）中（ちゆう）ふ傳（でん）よりいそり
ふ傳（でん）しお傳（でん）つらり
幸（さい）余院（よゐん）れお時（とき）八月（はつがつ）亦（また）日（ひ）出（い）ずんく結（むす）末（すえ）城（じやう）志（し）傳（でん）きり
がふくおとらうくそなまよりお傳（でん）よりせれおあつ月
此（こゝ）十日（じゅうにち）わありれ法（ほふ）陸（りく）信（しん）於（お）れりやとら雲（くも）感（か）天（てん）
納（の）言（ご）れりおとらおらりせり

わつわりのわそへんわつわつら
あつはれ月（つき）はわりのいおと也

きこられたにほしく春あけのし

あきしと月のおひをかりり

先代建春の院皇冬を宿めくありしうきる付を跡

飯上人如磨大さそひく大井川の紅葉見よむら

まきさるに之佐仲のお宮室にさる御幸さるていゆ

れされ中納言実盛公のみくつりきる

いさるに君とてねものりむら

んのでのあしとせりきり

五

古今巻

ささくれぬ男こそはせれりしと

あふとてこれかゝるはつり

同は馬の巻やとゆきるはありお舎一のきるふ

お政お伝まきおのあ

めつりしと春ふにけしとらとせ

さしりののあそ吾のま

ささひゆきとゆら面白くあふたれふたおまは

お下のりやとつりきり

さりやとそり吾のま

人あふとつりきり

山崎の花久長みくしう

舟の影の秘事のそと

三河のついでいひうけくめきし神領さうご
おんどくおとせしゆき

山崎のそれ久長あむしわれん

わてのうらみ川をされとせらん

倉後上人首うりし川うらみのみせにくゆあを抄か
あて二十一年ぬふほひくぬまの羅奇合とくづけく
いりくれまぬとらごきききお高うしほとせり
後成は小判の詞をかせり又一巻ハ島河奇合と

古今巻六

〇六三

名付く是もお風一巻にづひく定おは此立位
ゆ後とてゆきり時判せと務をり法玉修りた時
もゆひふくす法とあさうりき法城法法にれい
まごりくそ防備ゆ後とて常運せ舞ゆり回常
あさうりきゆはるめくといひゆハ倉後八世まの親院
小近付ゆりぬいお合ハ五條とわ川あはれ秘蔵
れゆて末代よそあづりれあまはわの南しと
りあおゆれき付番とまのこやゆひく二巻は奇合
とさづけきりけゆと抄一巻はきりしうりきゆ後
に此五代のちなれらるるうらみ世にわく人ふさく

世々新古今撰者ふらりりや代此まゝ字あはれ
 小ほくひくま名紙のあたるひやさるゝあはれ
 後多羽院路へあれ道中さあはれ有き所は後系極を
 小戸合あせせきさる付は直養とせせはさるハ
 家徳ハ末代の人此ゆくゆあはれが宗城をあらせは
 たりやりせまひいふ所は屋敷なりと人此お世
 きを海軍のひ合せられく目録後あはれいふ
 うの二巻はあ合小字をあはれれりあはれつゝいふはま
 此あはれ意あはれ雁あはれあ合は表紙なりとさつり海あり
 後なりいふみまを門よせさへいふ

古今巻下

そく板の雲りくけをそそふ

久し後成り

あはれまゝもまを川此あはれハ

志川名をくけはたのりやあはれ

又二首をそく物を海同ハ

契とさうらまをけよりそ人ぞん

わあはれうらのあはれをいふあ

あのみはれうらあはれをたけいふあ

くらせひをそま川いふあ

久し上人

小人を人としてありてゆきてその文を汝様くうされ
大おどけくとりて足すひたり文章のくく一室相
傳れけり少くもさそんれをいそく傳
すよめつさあゆらんふまはゆれを傳しやせぬ
義連よしづ小祝こむかひふりてまれと傳くきてあゆくと未
よりせんを雲うみあまうて義深てうらわんくも
おほひを扇あふく一扇のあてまゆひたり

いづれを伝ふれこの義深あまうたか

いづれの古系よりきくらんか一

かくまゝ義連ふこれり判らうく尾小ぞせを

古今卷六

〇五十六

あけつりよりきれん義連判らうく尾小きまび
てぞり年長月自ゆとひを有文おあ自筆れけ書
下されま細うやとふとふとのこくりの尾伝
きりくくは後右大臣の財伴れ尾が女むすめの扇の下
文張指く河津小ぞくゆりきり年長月自かえぬ
きりひひきれんの自筆そのこれけとふより
て安あん流りゅう一ふきり伴ばん扇せん後ご骨ぼねくくりのありんまおハ
細骨かほあくとんゆきうゆきくみまふとて
くくりゆかり

同とおとまにあく指くれを後よいらこのきり

みなりと藤成みくまにわ桑田而時政うけを傳う
きふ歩城あんしきる

も藤成れいらとさうくわりのあきり

大物とりとあつた

じぶらういざなれーカクらん

わぶあまは傳ぐりやまも藤成うりて暮りきる藤成
うりなりをれをさきうーわけるりの後
ふざれといひたる藤成意あめく

わさまーやわりといひたあさきた

藤成うけつるつゆのりゆり

古今巻又

〇八十七

土師の院うく冬く百首成うゆせちりーまうて
そふゆか藤成お長れ中へみせふつひされり藤成が
わゆり小目かま不忠候は受くまれば藤成のりよぶ
いそぢなれとせきし人れ縁のやうふそせなりて空飛
お中のりやと懸成あひ小ゆりたりきれな合流して
藤成炎の相をく半付ゆりて藤成れゆりて藤成みとる
きゆり

秋れゆり藤成たりむりて藤成のより

あれゆり月を物とされと藤成

は藤成ふりて冬く藤成れり藤成りて藤成りて藤成り

あそれく喜ぶるゝとぬくの運條の綱ともわたりけ
てよみ物る

わつさへ一冊を中をいかりおぼせん

少くは源を日守くき好世へり

源へりは由製ハおらとねりの國をとききふひと
おのくわへてあそき物れ装束のうくふとねり附
ふく心おれ系ふれあひまはふまてさうれおふと
てとえ侍らうの根は何れも世おまふれは源ま
足ありあふくね道のてくを再よとらおふまむを
かりひ也あ流れは創製と昔れとらねはとらおその

古今卷又

〇六十八

ゆつたそのうとゆめれの大柳をのりむにとてせあひ
向きり貼くく老く百そびよゆせあり一ゆりきる
と大柳を感^ん悦^ぶのありに寄くおま^いま^いふれりゆへ
足をもつらりきりきり二おは百そびく一まの種
そりりゆへみまそそりれまふおおむとらゆへ
あられきりゆへ久くをまそと源ののひくといそれゆへ
わつれお不無休なるゆまうれ故流れゆへにおそたげ
とせ流りねとて少くゆへのとらやされきりま附はゆへ
むげよおさなくつとせ流々海の中へゆへてあ附の
五割をさそめてつれゆへとわくゆへははいゆへとね

せられうし海にバのたのむをそとてめてしうりや
されたりとわたりぬきてのゆり

松坂傍の杉意赤痢病は大半ありて松奈治わが
ありきるに少海とらとせざる者も志を此毗沙門に
よりきりきるに張れん張れんわげとらにわげし
きあり鬼形をく傷とせやや呼とせればおぼし
むがくえびとまりをれを鬼形一首のむかえと録し
りけし

去見此は瓜のあまりにのみよの原

川あり清くもなる月う形

古今巻五

〇五九

飯ののまゝより胃をく心肝をさみくそとて
程小差さのぬを後病忽やとて解のどくふかりよ
きりば芳蓮保年九月十二日因裏の百くはれ舎
ふ河の月頃家深はつう海川もる也ははのあふ流え
も細更志控あよとそ不思候の半人
法門院沖文の四時六半の歌後いして人より
かりあり浅くせ度れたり空あふ飛陸の年とて同く
あり 此はよ古あり

まののけきりくみりてはれより

わが川とらりうさりのハガ

げうては美人同く書く事せうり同くの程
由ふ小真まことはよよも沙汰ありきりとぞ

後名羽院はねいんの尉ゑい未立指ゆび以考こう通とほ外がは長なが小出こで聖せい聖せいとつ
らせられ多くとせうりりあきる尉ゑいなううまはま聖せい聖せいと
は約やくト小あつけせせうりりきると程ほどとゆふまは
まはま聖せい聖せい小付こづくもりきり

らまはまててそままててやままひひのの後のま

老のあまあま北のあひあひけるけるゆ

唯ただ酒さけ座ざ位いの尉ゑいあまあまのの宗むね春はるままなりなり他ほか若わか北きたああは
かかくくてて前まへ儀ぎ判はんああくくゆゆききるるにに古ふる寺てら月つきくくつつままは

古今巻

○卒

おまおまおお下したははううままんんののままりり

むむりり一一おおややううままののああううととあありり

わわうう門かどままととああくくととああのの月つき々々

びびきき観かん急きゅうふふううああひひくく疑ぎ小このの威いままききりり要よう談だんとと急きゅう也や

おおははままれれううりりききるるにに事ことままととくく人ひとととああままききるるははあありり

左ひだり富とみ禮れい少せう尉ゑい楯たて親おやままはははは供たてまわりりてて知ち家けおお下した知ちききるる小

速はやつつととせせくく古ふる寺てら月つきのの宗むね春はる親おや威いのの物もの縁ゆかりととあありり

ととそそううまま紙かみををああららせせききりり知ち家けおお下したききるるははあありり

物もの縁ゆかり小こ給たまりりるる紙かみいいららそそうう知ち家けおお下したははままととあありりととあありり

此こゝ神かみ幣はらひままままととあありり一一楯たて親おやままはははは供たてまわりりてて知ち家けおお下した知ちききるる小

定て片りまきんりり居てまろん居り

寛元元年二月九日若守等よりまろり居る所本意

駿河前守府多聞志保より名の海わりの海を

の枝とけて出帆の蓋ふねとて出帆せしが

みろせ海に舟とむしむひつけく大船を二位返して

舟とけにふぬひま海

此言ふよりむさふれ家白書は

あれやらとせの舟の物くれ

舟とけ仲文の舟とて舟りりて出帆をやりしと

尾張因幡として出帆し船をまきせり

三古今巻ふ

〇六十一

舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり

舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり

寛治元年二月廿七日尾張志保より舟りり舟りり

舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり

舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり

舟りり舟りり

舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり

舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり

舟りり

舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり舟りり

ゆゑに代々の法ありひきき

けり昔の天曆の中にもうとありあり世に

時算はこれのちもあつてせたりしは昔の

山ぶりの物よひもあつてあられを

まらふあつてもあつてあられを

智の世なりわたりて

此

とて行くとあつては

たとへくとも後

はゆふ修撰よへりいひあつて

古今

六十二

例にふくまはれりてして

大略に形勢をあらわし

くこれの法をあらわし

まらふりせん

ゆゑに

ゆゑに

源氏物語の

たゞこれに

あやうりの

の是れ

とてそゆきりばさうに女房に人をもてゆきり
かば法師をみくわれも人をもて花をんえさや
なんどわざきりつるさ房は花一枝おそひて
中いりりきれそあの法師うちわんで

おのれをわたりこそやね様也

さげのきりやわりのわりそ

といひつけたりきれいひつる女房えいさ

とておしわきれこそきりきり

入道者大寺真親と法師のゆきにさひはわり
きれ先きりて一着れおゆき

古今巻五

○六十二夜

おそれそむくおはわらげ捨て

おれいそそにふさうりそ

ゆき

あの上れきりひそゆきさうり

おれそ人をもすそ

ははさかたゆりて悪あひくおれそききそ
あくおの雅定お付てや入物くはさうり
て知ふたり言真事此は時悪性法師くわりの
さうり入道さうりくやゆきりそ

古今著聞集卷之五終